

特集

植える、育てる。 新しい動き。

日本の森林の約4割は人工林です。人工林では、木々の込み具合に応じて一部の木を伐採し、残った木の生長を促す間伐が必要です。間伐により、太陽の光が林の中に入ることによって、下草や低木が繁茂した豊かな森林に育ちます。また、人工林という資源を循環的に利用していくためには、伐採後に苗木を植え、必要な保育を行い、森林を育てていくことが必要です。

このような間伐や植栽などを担う造林事業体は、高性能林業機械の導入や若年の雇用が進む素材生産事業体に比べ、その経営や活動が注目されることが限られてきました。しかし、近年、新たな意欲を持って造林に参入し、特徴的な取組を行う事業体が現れてきています。

本号では、伐採方法やその後の造林を森林所有者に提案し、森林づくり全体のコーディネートに取り組む会社、森林所有者からの依頼を造林事業体につなぎ、安全講習会の開催などを通じて造林事業体を支援するNPO、製材業から山づくりに参入し、低コスト化・省力化を進めながら造林に取り組む会社を紹介します。

センダンの稚樹



和 歌山県田辺市の(株)中川は創業4年目の造林事業体です。

(株)中川は、植栽・下刈などの作業を単に請け負うのではなく、伐採する区域や残材の処理方法などについて連携する素材生産業者と予め取り決め、また、伐採後の造林方法について所有者に提案して合意を得るなど森林づくりのコーディネートに力を入れています。

森林所有者の中には造林について関心を示さない方もいます。このような方々に対しては、例えば、ドングリ拾いにおいて、そのドングリが苗木に育った時点で「トトロの森を作りましょう」という形で植栽をお勧めするなど、ストーリー性をもった説明で造林につなげていきます。

現場職員の一日の現場作業は6時間。超過勤務は一切しません。このため、限られた時間内で確実に作業を完了させる



植栽地



地寄せ作業



造林地を飛ぶドローン



植栽地



ウバメガシのコンテナ苗



センダンのコンテナ苗



スギのコンテナ苗



特製の苗木袋を持つ(株)中川の中川 雅也さん

ため、鹿柵を設置する際に使う針金を予め切り揃えておく(設置効率が3割アップ)、苗木の運搬がしやすい特製の袋を地元の特産屋さんで作ってもらい、様々な植栽器具を試して効率的なものを使うなど、きめ細かな工夫を凝らしています。また、鹿柵の破損の有無、下刈の状況などの確認は、急峻な造林地を歩き回っていましたが、現在はドローンで済

ませるようになっています。(株)中川の職員は19人。会社として、給与や休日、福利厚生 の充実 に努めている こともあり、創業以来、正社員の退職は一人もありません。職員からは、作業の進め方について様々な提案があり、職員内での検討を経て提案が採用されることも多いそうです。

(株)中川では、森林経営計画5,000ha、職員数50人を目指し、造林作業というサービス、林業・木材関係者のコーディネート、地域の森林づくりのコンサルタントとしての役割を担う3次産業の会社として事業展開を図っていくこととしています。



下刈 施工中



山の神祭り



講習会（林業大学）での指導



植付 施工中



NPO法人 ふるさと創生
理事長 坂東 博暁さん

で、どのように手入れをしていくかを所有者と相談して決めます。その

との交流を深めていく中で、森林の手入れの依頼を受けたことをきっかけに、2008（H20）年より、森林整備活動を進めています。

所有者から森林の手入れの依頼があると、ふるさと創生は、森林経営の委託契約を結び、境界等を調査した上で、

ふるさと創生と連携している林業事業体は34事業体。事業体が安定して周年雇用できるよう、各事業体からの要請や現場条件に応じて事業をこまめに発注しているほか、安全講習会の開催や安全装備の購入支援等を行うことで、

後、造林や間伐などを林業事業体に発注するとともに、生産された木材の販売や補助金の申請・受領・精算等の事務までを行っています。

2008（H20）年に80haの経営委託面積からスタートした森林整備は、その後、□□□で依頼が広がり、2018（H30）年には、間伐160ha、植栽59ha、下刈278haと地域有数の事業量にまで大きくなっています。また、森林所有者から経営の委託を受けている森林は1,360haを超えるまでになっており、活動範囲が広がっています。

NPO法人 ふるさと創生

熊 本県阿蘇市の「NPO法人ふるさと創生」は、阿蘇地域の活性化を推進し社会に貢献することを目的に2003（H15）年に設立されたNPOです。地域の住民の方々



間伐 施工中

事業体の育成にも貢献しています。

ふるさと創生は、

- ①あくまで「育林」に軸足を置きながら、
- ②森林所有者・請負事業体・ふるさと創生の3者が「ニコニコ」できる運営をモットーに



鹿ネット 施工中

- ③「ふるさと創生が手入れした山が美林になった」と言われるような「NPO品質」を確立すること、

を今後の基本的な方針として活動を続けていくこととしており、今後ともさらなる飛躍が期待されます。



栃 木県鹿沼市にある(株) 栃毛木材工業は、育

林、皆伐、製材、プレカット、建築と、林業を一貫して手掛ける創業60年を迎える企業です。

元々は素材生産を中心とした事業体でしたが、山主からの依頼で10年ほど前から社有林を保有するようになりまし。今では栃木県・群馬県・茨城県で延べ1,600haほどの面積に、



(株) 栃毛木材工業
代表取締役 関口 弘さん

毎年約5万本の苗木を植えて育林から伐採後の造林まで行っています。しかし、



植栽



下刈り



皆伐 (手前) 及び間伐 (奥)



皆伐

森林経営を手がけ始めた当時は、植林に関する知識やノウハウはなく、まさに0からのスタートだったそうです。そうした中でも、森林組合や外部の造林事業体に協力を仰ぎながら育林のための取組を一つひとつ試しては、より効果的な造林を目指して経験を重ねてきました。

また、2年前から山の裾野にセンダングサ、クスノキなど、成長の早い早成樹を植える取組にも着手。現在は、早期の実用化に向けて平野に試験林をつくっては、シカによる食害の少ない木や獣害忌避のための資材調査、20年前後で伐採できる早生樹とスギ・ヒノキの採算性の比較、多種多様な木を植えることで病気が流行した際のリスク分

散効果など、低コストによる山林経営の実現に向けた様々な試みを行っています。

(株) 栃毛木材工業の現場で働くスタッフは20代〜50代で構成されており、平均年齢は38歳です。部門ごとに技術研修を行うほか、全員参加の安全講習も月に一回に行われ、技術の伝承と安全の確保のための情報共有に努めています。

またこの業態では珍しく月給制と完全週休二日制を導入しているため、安定した雇用形態によって離職率が低いことも大きな特徴で、社員が楽しくやりがいを持って好きなだけ働ける環境づくりに一番気を使っている



早生樹

このことです。今後は、増えてきた山の蓄積に合わせさらに林業に注力し、5年後には今の倍の素材生産量を目標に掲げ、日々業務に励んでいく予定です。